

まんがにおける

まんが月評⑨

# 原作の現状をみる



出席者

■原作者  
福本和也 平井和正  
■まんが家  
桑田次郎 つのだじろう  
貝塚ひろし 水野英子  
■編集者  
細野みち子  
■司会・尾崎秀樹(願不同)



■量産とスピード化によってふえる原作つきまんがの問題点をえぐる！

まんがブームがキツカケに

尾崎 原作つきまんがの歴史というものは、戦前にも、「長靴三銃士」などがあるわけですが、はつきりクローズ・アップされてきたのは、民放の開始、テレビの開始、少年・少女週刊誌の創刊という、ここ十数年来のものではないかと思うのですが、きょうお集まり願った送り手の原作者、その描き手であるまんが家そして編集者のみなさんの体験というものから、話を進めてい

ただきたいのですが……。

宮原 そうですね、はつきり、原作つきまんがを生みだそうと編集のほうで意識したのは、週刊誌の誕生より一、二年早い昭和三十二、三年ごろではないかと思うのです。この時代は、いわゆるまんがはんらん時代で、手塚作品の亜流がどつとでて、ちよつと絵が描ければ、だれでも雑誌、単行本に発表できるような時代だったと思うのです。とくに単行本の出版社が乱立し、それほどすぐれた作品でなくとも、どんどん採用していた。そこでまんがの需要と供給のバランスがくずれてきたわけ



司会・尾崎秀樹氏

です。そのために、ごく少数のまんが家に注文が殺到し、まんがの混乱を引き起こし、これではいけない、なんとかしなければ——ということで、作品数の少ない作家に、いい作品を描いてもらう必要性がでてきたんです。当時『なかよし』の牧野編集長が、原作つきまんがと、本気にとり組んだのが最初ではないかと思うのです。その直後に、『少年マガジン』が発行され、一流作家の作品はなかなかとれない。作家が二流でも、作品は一流を要求される。そこで、原作つきまんがに目を向けたわけです。

尾崎 原作つきでヒットした作品といえは、まず『月光仮面』があげられますが、宮原 あれは、最初テレビでうけて、雑誌にはいつてきたもので、名作物となじく純粋な原作つきまんがとはちがうと思うんですが……。

桑田 あれは、私が『少年クラブ』で連載したのですが、最初、シナリオを見ても、まんがにはなりにくいのです。そこで、シナリオからまんがになるポイントだけを抜きとって、改めて作りなおしていったわけです。ですから、原作とはずいぶんちがってき



宮原 テレビのシナリオとまんがとは、

やはりちがうと思うんです。テレビでは、走ったり、とんだりする動きがアクションになりうるが、まんがの場合それだけではどうしようもない。シナリオを、そうとうアレンジしないとまんがには使えないんですね

尾崎 名作といわれるちばさんとの「ちかいの魔球」は、いかがでした。福本さん。

福本 はじめ、野球ものをやりたいという話があったわけですが、そこで、いまま



での野球もののように、ただ単に投げて、打って、走ってというだけではつまらないので、野球の持つ精神的なものをもちこんだらどうだろうといったわけです。それについて、議論百出だったのですが、けっきょく、それでいいということになりました。最初は、あまり人気がないから、やめようという話があったのが、だんだん人気がでてきたような状態です。(笑)

尾崎 「エイトマン」の場合はどうですか？

平井 私は、もともと小説をかいいていましたから、まんがという視覚化作業についてではまったくしろうとでした。だから、はじめは、書きなおしにつづきながら、おしでした。それに大衆ものの特有の

センセーショナルリズムに対して非常な抵抗を覚えて、どうにも筆が進まなかった。(笑) そのうちに、センセーショナルリズムにも、いろいろあることがわかるようになりました。(笑)

尾崎 少女ものは、少年ものより早い時期に原作つきまんがを手がけてきているようですが……

#### 共同制作で量産体制

水野 私の場合、デビュー当時、長編を作るだけの技量がなかったもので、原作をつけてもらったのです。最初、童話ふうの「赤い靴」(少女クラブ)を描いたところ、編集部の手想よりできがよかったんですね。そのころ、手塚先生の「リボンの騎士」が終わって、おなじような夢のあるものということが編集部の考えだったのですが、やっているうちに別のものができてしまっ

て……。 (笑)

#### 原作はヒントの

#### ようなもの

尾崎 だいたい原作つきの初期の人気作につい



てお話をうかがったのですが、「少年サnder」は、あまり、原作ものはあつ

かっておられませんが、長田 意識的に原作つきをさせていると

#### まんがの原作をかい

梶原 一騎



児童雑誌界が、月刊誌だけの頃の末期、われこそは戦後の佐藤紅緑あるいは山中幸太郎たらんと、冒険、熱血、スポーツ小説などを発表していた若きボクにとって、テレビ文化に伴う誌面の視覚化は一大打撃であつた。轟然たるストーリーまんがの洪水！ボクはまんがに大敵心をいだいた。

おりしも、到来した週刊誌時代。これとて、緑なき現象かとながめていたところ、「少年マガジン」からまんがの原作なるものを依頼された。やっていたうちに、わが腕の中にどえらい美女がいることに気がついた。一週十五ページとして、一年やった場合の膨大なボリューム。少々高い内容であっても視覚化による平易化。その気になれば、これは壮大なるロマンをもちこめる可

いうわけではありませんが、どういう形であれ、いい作品を載せていきたいという考えでやっているわけです。たまたま、オリジナルものにずっといい

氏 ものがつづいたというわけ

尾崎 オリジナルものもいいという問題についてはどう

宮原 私どもは、どの雑誌がどうこうと

いうより少年まんがの発展のうえで、ひとりの人間が作っていくことに、限界があるのではないかと思うのです。

能性があると考えた。「巨人の星」の主人公の名も、飛雄馬——ヒーロー——人間、ところを合わせて意気こんだ。川崎のぼる氏と炎天下の甲子園に取材遠征もした。グライ、ドにおどる高校球児たちにダブらせて、飛雄馬が、花形満が、左門豊作が、この大舞台でどう戦い、泣き、笑うかを白日夢のようにボクは見えてしまった。

そのとき、ボクたちの近くに、ゆかいなおツサンが、球児らの一投足ごとに、技術論など大声でやらかし、周囲の笑いを集めていた。わが白日夢の悲壮美のみに酔うボクにぼつんと川崎さんがつぶやいた——あんなおツサンもだしたくないですね。と、そこに強烈に「川崎のぼる」がいた！ほんのこれは一例だが、異なる二つの感覚の結婚(だからして当然うまくいかぬ場合もあるが……)。また、量産をしいられる時代に分業による能率と完成度の高さなど、原作ものの意義であろうか。

そうであれば、なるべく、多くの人の手をわずらわして、少しでもいいものを作っていくほうがいいと考えています

尾崎 その点、つのださん、描き手の立場からどう思われますか？

つのだ まんがは、小説でもなければ、映画でもない。したがって、まんがでしか描けないものがあるはずだ、とぼくは考えています。だから、自分で考

え、自分で描き、でき上がった作品は、最後まで、自分の意志と主張のおつたものでなければならぬと思うんです。その点、原作者がえがいたイメー



ジが、まんが家に渡ったときに、そのまま生かされるかどうか、むしろちがったものでできてしまう場合だってある。そのあたりに疑問があります。もちろん、成功しているものもあることは認めますが……。

貝塚 原作とまんがの関係は、小説と絵の関係とちがうと思うのです。

福本 私の場合ですと、原作は文章ですから、視覚的ではないですね。それをまんが家が読んで、十枚のうち一枚がよいと思ったら、あと九枚を捨ててしまってもいいわけです。「ちがいの魔球」のときなんかは、ぼくが来週これはどうなるんだろうと思ったことがたびたびありましたね。

つのだ 原作者が、来週どうなるんだらうでは、ちょっと……。(笑)

福本 原作はほかないのですよ。(笑) つのだ いま、福本さんがいわれたのはまんが家側の力の問題だと思っただけで、そうですね。力のないまんが家にいくらいい原作をあてても、それが一流作品にならないと思いますね。

福本 原則として、原作者プラス編集者プラスまんが家だから、いいに決まっている。そのなかで、まんが家がオリジナリティーをだせばいいわけですよ。私も原作者として同感です。原作

はヒントのようなものだから。(笑) 桑田 原作が一、まんがが一で合わせて二になるとは限らないが、ひとりの一という力が一・二、一・三と少しでも二に近づけば成功ですよ。

平井 ぼくは、まんががよいも悪いもまんが家の力が、八十、九十パーセントであり、原作がその作品に貢献できるのはせいぜい十パーセント、よくて二十パーセントくらいだと思っています。宮原 いま、原作者の側から、たいへん謙遜された意見がでたのですが、ぼくはそう思わないんですね。よい作品は、どちらが欠けてもだめで、でき上がりが十としたら、原作が五、まんがが五というものではありませんが原作



左より貝塚ひろし、平井和正、福本和也の各氏

として完成されたものを、まんが家が自分のものにするかどうか問題です。貝塚 それに原作者とまんが家のあいだにはいる編集者の力も大きいですよ。

長田 原作が主となり、まんがが従となるケースが多いんじゃないですか？

福本 そんなことはないですよ。あくまで、セラムセラムですよ。ただ原作が編集に渡り、そこからの注文はくるが、まんが家から、質問なり注文がきたことは一回もない。これはさびしいですね。

つのだ そこが、現在いわれている原作もののいただけない点ですよ。

長田 一プラス一が二とならずに、マイナスになることもありうるわけですね。

桑田 また、このケースで失敗したときのみじめさは、ひとりで描いたときより大きいですよ。発表の形がまんがであるがゆえに、百パーセントに近い負い目を感じさせられますね。

つのだ 原作者とまんが家の発想が一つにならなければだめだと思いますね。太い一本の幹は決まっています、枝や葉だけを、その週ごとに検討していく形がでてこなければならぬですよ。

福本 やはりぼくは、まんが家がひとりで描いたときを十にすれば、原作をつければ十三くらいにはしたいですね。

細野 少女まんがの場合は、比較的原作ものが多くいます。でも、少女が持っている微妙な心理は男性にはわからないところがあるのです。だから、男性の原作ですと、根本のすじはおとついても運びがむずかしいし、まるっきし、原作とは反対の方向にいくこともあるんです。(笑)



まんが家にも主張を……

貝塚 それだったら、自分で描くべきですよ。

平井 生きている人間を創れば、おのずとストーリーは生まれてきますよ。

貝塚 それは、ぼくらもいっしょです。ぼくは、むしろストーリーの面で弱いから、スランプのときなど原作をつけ

てみてはと考えることもあります。水野 私はつのださんといっしょでオリジナルの方針ですし、原作ものは「銀





左より宮原照夫、長田守、桑田次郎の各氏

「花びら」とあとは映画や名作ものぐらいいです。作品は自分の思想であり、心であるから、オリジナルでやらなければならぬと思います。

**宮原** 水野さんは、個性的な作家ですから、それがいい悪いということではなく、水木さんもそうですが、原作とかみ合わないという場合は、たしかにあると思います。だれにでも原作があてはまるものではないというのは事実です。

**福本** まんがの原作は、まんが家を感動させるものをかけばいいと思いますね。

**水野** いいたくはないんですが、少女マンガの場合は、原作つきがあたりまえのような状態になって、悲しいことだけど、作品に対する熱意や思想が見られ

れないことです。原作者側にも、少女ものという観念があつて、あるパターンを作っているように見受けられます。もっと型破りのストーリー、ヒロインを生みだしてはどうでしょう。

### まんが家の意欲をもやす原作を

**尾崎** 原作者とまんが家との名コンビがありますか？

**福本** ぼくの場合、原作をまんが化した人がぜんぶちがうのです。けっきょく成功したから、しっくりいっているといわれるわけで、これは結果論ですよ。

**宮原** ぼくは、それには二通りあると思います。一つは「巨人の星」の梶原さんと川崎さんのように、おふたりの人生感なんか似ているため、原作とまんがが一体化していく場合と、まんが家が原作をうまく自分のものとして、原作のアレンジに成功した場合の二つがあると思います。



**平井** つのださんは、まんがはひとりで描いたほうがよいという意味のことをいわれましたが、テレビまんがなどチームを組んで仕事をするとは絶妙な醍醐

味を味わうことができます。つのださんの場合、原作者とうまくいかなかったのではないですか？

つのだ そういうことはありませんよ。八、九年前、獅子文六さんの「悦ちゃん」をやったとき、シナリオをかく人が、ぐるぐる変わって、主人公のイメージが一貫しないため、ずいぶん苦しんだことはありますが……。



いまの原作の場合、一般的にみて中途半端ではないですか。原作は初めから終わりまでプロットが完成されていて、まんが家が原作者の意図を把握し、ここはこう展開し、こう盛り上げ、こう構成するというように演出できるものでなければならぬですよ。

**水野** 宮原、桑田、それが理想ですね。宮原、だが、おたがいに根本がはっきりわかっていれば、ぜんぶできていなくてもいいのではないですか。

**福本** だから現実的には、最低五回分くらい渡すのが理想的だと思いますよ。

**尾崎** 「巨人の星」、「幻魔大戦」など原作ものの話題作があるわけですが、現在連載されている作品について、少し

話してください。つのだ「巨人の星」は原作の力を感ぜますね。

**細野** 宮原、あとになってわかったことです。ですけど、川崎さんは「巨人の星」に限らず熱血感動まんがを本命として描くべきまんが家だったと思います。いままでどちらかといえば、かわいた作品が多かったが、そのなかにチラッとする感じがうきを感じる点がありましたね。それをたよりに「巨人の星」をはじめたのですが、三、四月ごろ甲子園大会のストーリーのなかでラ

イバル役の左門豊作が、おいちを語るところがありました。その原作を読んで、川崎さん泣いておられるんです。自分のおいたちと似ているというんです。こういったところから川崎さんのからだの中に、熱血物を描く血が

かよっていたと思います。この「巨人の星」のストーリーは、ちょっとまちがうと、ひどい作品になってしまう要素があります。それをみごとにこなしている点、やはり川崎さんの力は大きいと思いますね。

**貝塚** 川崎さんのまんがは「巨人の星」などでなく、ぼくは「大平原」とか、「スカイヤーズ5」などに、ほんとう

のよさがあると思うんですけどね。





まんが家が感激する原作を！

だし、石森さんと私に原作を別々に作らせたのです。そして、でき上がったものが、みごとびったり噛みあったわけですね。そこで、編集部をまじえて、話を進めているのですが、ぼくは「幻魔大戦」に限らず、まんが家の潜在的な可能性をひきだすような原作を書きたいですね。

長田 川崎さんは、二、三年前大阪の友人から、ストーリーの展開だけを追っかけていてはだめになるといわれ、その壁を破るためには人間を描かねばだめだと考え、九州の天草へいき、「キャプテン五郎」の構想をえてきたわけですね。それが「巨人の星」につながっていると思うんです。

平井 人間を描くというけれど、まんがに要求されるセンサーショナルなものはまったく相反するもので、むしろかしいですね。

尾崎 「幻魔大戦」なんかどうですか？

平井 あれは、編集がおおまかな注文を

桑田 ぼくなんか「月光仮面」や「まぼろし探偵」が成功すると、ワクをはめられて、ほかのものを描きたくても描かせてもらえないんです。（笑）

細野 少女ものの場合も同じですね。

尾崎 原作ものは、ますます、ふえていく傾向にあるんですが、今後のあり方についてはどう思いますか？

桑田 一回一回の原稿を渡されて、きめられたページ数にのっていき、まんががさし絵に近づいていってしまおう。だから、もう少し多く渡して、まんが家のオリジナリティーをひきだす余裕をあたえてほしいと思います。

平井 ぼくは、まんがは、今後ますます高度化し、文学と対等の存在に近づくのではないかと思います。ですから原作者のまんがの中で占める位置は、さらに重要なものになっていくでしょう。

貝塚 その意味でも、オリジナル作家は原作つきまんがに負けないように努力しなければならぬと思いますね。

細野 私の場合、原作者に別ないうことはありません。原作を自分の方向にもっていかばいいことで、要は主人公になりきることがたいせつだと思っています。

水野 原作におおいにけっこうだと思えます。原作者には、まんが家の意欲をもやすものをだしてほしいし、まんが家

■寸評■ 尾崎 秀樹

原作つきまんがの伝統は、織田小星（アサヒグラフ局長）と樺島勝一の名コンビによる「正チャンの冒険」らしいものだが、このときすでに現代までの原作つきまんががはらむ諸問題が内包されていたといえる。

ラジオの民放開始、テレビ時代の到来、出版社のまんが週刊誌誕生、それにづく少女まんが週刊誌の登場と、戦後のまんが状況を描くいくつかのエピソードとともに、原作つきまんがの問題が再燃しているが、それというのにも原作をつけることでまんがの可能性をさらに拡大しようと願う送り手たちの願望のあらわれなのではなかったか。

原作者とまんが家との協業の必要性は、まんがが創造が企業化するにつれて、今後ますます高まるにちがいない。その

際まんが家は原作に依存するのではなく、むしろ自分の可能性をひきだす触媒として、原作者のもつ構想力のうまみをドン欲に利用すべきなのだ。

名コンビといわれる成果は、すべてこのような可能性における協業をさす。小説の世界でも作者と挿画家のコンビは、太夫と三味線、飯と汁にたとえられる。しかしこの場合は小説あつての画であるのに反して、原作つきまんがの勝負どころは、まんがの側にある。

その意味では原作に忠実にしたがうまんが家、かならずしも最良とはいえない。原作者からは人間像の性格づくり、状況の可変部分のアイデアをもらうべきであって、まんが家は触発された可能性に応じた発展をその上に試みるべきものなのだ。

は、自分を忘れないでほしいと思います。また編集の方も、一歩も二歩もつっこんで研究してほしいですね。

つのだ まんが家は原作があるから楽だ。また原作者も、あのまんが家は力があから、このくらいいいだろう。と。いったお互いにアテにするようではだめで、お互いがじゅうぶん検討しあい、完全な作品を読者に読んでもらう努力をしなければ、賛成できません。

尾崎 結論を一言のべさせていただければ、量産の問題とますます複雑化していく社会機構をひとりのまんが家の力

で多角的に描くことは容易にはできなくなってきたと思います。そこで、今後、原作者とまんが家との共同作業という形はますますふえていくことは予想されます。まんが家は、原作があつて、それに依存して描いていくということではなく、原作を利用しながら、自分のものを打ちだしていくことが必要であつて、ある意味では、両者は、敵対的関係にあるべきだといえます。そういう作家とまんが家の関係が成立したとき、原作つきまんがの可能性も開けていくのだと思います。（おわり）